

すずきほくし

## 鈴木牧之と『秋山紀行』

鈴木 牧之は、江戸時代後期の越後塩沢の商人であり、随筆家です。越後塩沢の小千谷縮の仲買と質屋をする商人の家に明和7年（1770）に生まれました。地元では有数の豪商で、幼少のころより父親の影響で俳諧や書画をたしなみました。

19歳の時、江戸に上り、それをきっかけとして小千谷縮の仲買や質屋の傍ら、独学で勉強し、江戸に雪国の自然や生活を紹介する『北越雪譜』を執筆し、山東京伝の弟山東京山の協力を得て天保8年（1837）『北越雪譜』を刊行しました。

『秋山記行』は、文政11年（1828）、鈴木牧之が、桶屋の団蔵の案内で、7日間かけて秋山を旅し、江戸時代の秋山の地の生活や珍しい風俗や習慣などを絵と文章で克明に描いた紀行文です。

この『秋山記行』は、江戸の滑稽本の代表作『東海道中膝栗毛』で知られる戯作者十返舎一九が文化15年（1818）、越後旅行中に牧之の家を訪問した際に勧められて書いたとされています。

牧之は、当時、世情や景気が陰りを見せ始め、薪などの燃料材の利用で対立問題になっていた塩沢などの町場とは異なり、薪を潤沢に使うなど生活・自然が豊かで、泥棒に入られる家もなく、農作物が盗まれることもない平穏で静かな理想郷（桃源郷）として秋山を見ていたようです。

同時期の紀行文として菅江真澄の「菅江真澄遊覧記」があります。菅江真澄が客観的にスケッチとともに記録をしているのに対し、鈴木牧之の『秋山記行』は、鈴木牧之自身の主観を踏まえながら記録され、当時の人々の秋山に対する感じ方を伝えてくれます。

秋山を探訪した後、『秋山記行』が書き上がったのは3年後の天保2年（1831）でした。その後、出版を依頼した十返舎一九が亡くなり、出版は宙に浮いてしまいました。

牧之も天保13年（1842）に死去し、『秋山記行』は出版されることがありませんでした。そのため現在、『秋山記行』と呼ばれるものは、自筆草稿本として現存する資料を指します。



鈴木牧之の像



現存する『秋山記行』

●『秋山記行』に描かれた風景と現在の様子



見玉村正宝院不動尊



現在の見玉不動尊 仁王門



清水川原村之図



現在の清水川原集落



川東 三倉村



現在の見倉集落



三倉村橋之図



現在の見倉橋





秋山の温泉之図（湯本）

＊現在の切明



現在の切明



雑魚川の瀑（瀑＝滝）



現在の切明西方の滝



赤倉山（鳥甲山）



現在の鳥甲山



前倉村の橋の図

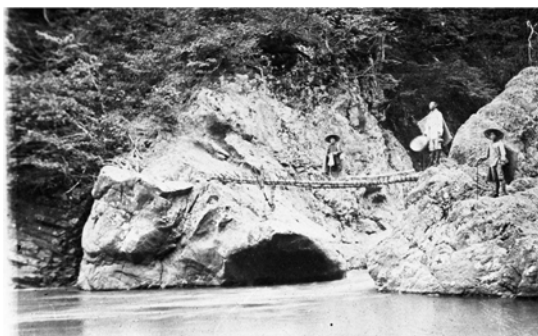


現在の前倉橋





猿飛橋



大正時代末期の猿飛橋



現在の猿飛橋



秋山家昨の図



旧福原家 (小赤沢保存民家)



旧山田家 (日本民家集落博物館に移築・復元)